

関係各位

財団法人 日本サッカー協会

国際サッカー連盟（以下、FIFA）から 2011 年 6 月 9 日付け回状 1265 号をもって 2011 年のフットサル競技規則改正について通達されました。下記のとおり日本語に訳すと共に日本協会の解説を付しましたので、各協会、連盟などで、加盟クラブ、チーム、審判員等関係者に周知徹底を図られるようお願いいたします。

なお、これらの改正は、国際サッカー連盟の通達どおり 7 月 1 日から施行することとします。

2011 年フットサル競技規則の改正について

国際サッカー評議会の小委員会と F I F A 審判部の協力を得て、F I F A フットサル小委員会は、2010 年フットサル競技規則に対して 1 点の改正を承認すると共に 4 つの F I F A 公式言語間の文章表現修正を行いました。承認後の競技規則改正要旨と修正を次のとおり示します。

フットサル競技規則の改正と修正 — 2011 年

第 16 条 — ゴールクリアランス

違反と罰則

現在の文章

ゴールクリアランスからボールが直接ペナルティーエリア外に投げ出されなかった場合、

- ゴールクリアランスは再び行われるが、4 秒のカウントはリセットされず、ゴールキーパーがゴールクリアランスの準備ができてから、続けてカウントされる。

ボールがインプレーになって、相手競技者が触れる前にゴールキーパーがボールに再び触れた場合（手、または腕による場合、もしくは味方競技者が意図なくボールに触れた場合を除く）、

- 違反の起きた場所から行う間接フリーキックが相手チームに与えられる（第 13 条—フリーキックの位置を参照）。

承認された文章

ゴールクリアランスからボールが直接ペナルティーエリア外に投げ出されなかった場合、

- ゴールクリアランスは再び行われるが、4 秒のカウントはリセットされず、ゴールキーパーがゴールクリアランスの準備ができてから、続けてカウントされる。

ボールがインプレーになって、他の競技者が触れる前にゴールキーパーがボールに再び触れた場合（手、または腕による場合を除く）、

- 違反の起きた場所から行う間接フリーキックが相手チームに与えられる（第 13 条—フリーキックの位置を参照）。

ボールがインプレーになって、他の競技者が触れる前にゴールキーパーが意図的にボールを手、または腕で扱った場合、

- 違反がゴールキーパーのペナルティーエリア外で起きた場合は、違反の起きた場所から行う直接フリーキックが相手チームに与えられ（第13条—フリーキックの位置を参照）、その競技者のチームにファウルが累積される。
- 違反がゴールキーパーのペナルティーエリア内で起きた場合は、違反の起きた地点に最も近いペナルティーエリアライン上から行う間接フリーキックが相手チームに与えられる（第13条—フリーキックの位置を参照）。

ゴールクリアランスが4秒以内に行われなかった場合、

- 違反の起きた地点に最も近いペナルティーエリアライン上から行う間接フリーキックが相手チームに与えられる（第13条—フリーキックの位置を参照）。

ペナルティーエリア内にいる攻撃側競技者がゴールクリアランスに干渉した場合、

- 攻撃側競技者がボールに触れた、またはゴールクリアランスが正しく行われるのを妨害した場合、ゴールクリアランスは再び行われる。

ボールがインプレーになって、他の競技者が触れる前にゴールキーパーが意図的にボールを手、または腕で扱った場合、

- 違反がゴールキーパーのペナルティーエリア外で起きた場合は、違反の起きた場所から行う直接フリーキックが相手チームに与えられ（第13条—フリーキックの位置を参照）、その競技者のチームにファウルが累積される。
- 違反がゴールキーパーのペナルティーエリア内で起きた場合は、違反の起きた地点に最も近いペナルティーエリアライン上から行う間接フリーキックが相手チームに与えられる（第13条—フリーキックの位置を参照）。

ボールがインプレーになったのち、相手競技者がプレーしていない、または触れていないにもかかわらず、ゴールキーパーがピッチの自分自身のハーフ内で、味方競技者によって意図的にゴールキーパーに向けてプレーされたボールに再び触れた場合、

- 違反の起きた場所から行う間接フリーキックが相手チームに与えられる（第13条—フリーキックの位置を参照）。

ゴールクリアランスが4秒以内に行われなかった場合、

- 違反の起きた地点に最も近いペナルティーエリアライン上から行う間接フリーキックが相手チームに与えられる（第13条—フリーキックの位置を参照）。

ペナルティーエリア内にいる攻撃側競技者がゴールクリアランスに干渉した場合、

- 攻撃側競技者がボールに触れた、またはゴールクリアランスが正しく行われるのを妨害した場合、ゴールクリアランスは再び行われる。

本条に関して、その他の違反があった場合、

- ゴールクリアランスは、再び行われる。違反がゴールクリアランスを行うチームの競技者によって犯された場合、4秒のカウントはリセットされず、ゴールキーパーがゴールクリアランスの準備ができてから、続けてカウントされる。

本条に関して、その他の違反があった場合、

- ゴールクリアランスは、再び行われる。違反がゴールクリアランスを行うチームの競技者によって犯された場合、4秒のカウントはリセットされず、ゴールキーパーがゴールクリアランスの準備ができてから、続けてカウントされる。

理 由

第16条と第12条の適用を同じにして、誤った解釈が発生するのを避けるため。

<日本協会の解説>

2010年の競技規則改正によって、ゴールクリアランスが行われた場合、ゴールキーパーは相手のハーフ内においても、味方競技者からパスを受けることはできなかった。一方、ボールがインプレー中の場合、ゴールキーパーは、相手ハーフ内であれば一度プレーしたボールを味方競技者から受け取ることができた。これらについては2010年競技規則に明記されていたが、2009年までの規則においては、ゴールクリアランスとボールがインプレー中のプレーにおける規則の適用が同様であったので、2010年の競技規則改正後、その解釈において混乱が生じるようになった。

この混乱を回避すると共に、ゴールキーパーへのリターンパスに関する罰則の適用の考え方を統一するため、ゴールクリアランス時も、相手ハーフ内であれば、味方競技者からパスを受けることができるとされた。また、ゴールクリアランス後、誰にも触れられていないボールを再び触れる（2度さわ）り）場合の条文にも、所要の改正がなされた。

この改正によって、通常のプレーの中だけでなく、ゴールクリアランス、キックイン等を含む、ゴールキーパーによってプレーが開始、再開されたのちの、ゴールキーパーへのリターンパスの対応はすべて同じになった。

修正後の競技規則の条文

第8条 — プレーの開始および再開 (英語とフランス語のみ)

キックオフ

現在の文章	承認された文章
<p>違反と罰則</p> <p>ボールがインプレーとなって、他の競技者がボールに触れる前にキックを行った競技者がボールに再び触れた場合（手、または腕で触れた場合を除く）、</p> <ul style="list-style-type: none">● 違反が起きたときにボールがあった位置から行われる間接フリーキックが相手チームに与えられる（第13条—フリーキックの位置を参照）。 <p>ボールがインプレーとなって、他の競技者がボールに触れる前にキックを行った競技者がボールを手、または腕で扱った場合、</p> <ul style="list-style-type: none">● 違反が起きたときにボールがあった位置から行われる直接フリーキックが相手チームに与えられ（第13条—フリーキックの位置を参照）、違反した競技者のチームにファウルが累積される <p>キックオフの進め方に関して、その他の違反があった場合、</p> <ul style="list-style-type: none">● キックオフを再び行う。アドバンテージは、適用できない。	<p>違反と罰則</p> <p>ボールがインプレーとなって、他の競技者がボールに触れる前にキックを行った競技者がボールに再び触れた場合（手、または腕で触れた場合を除く）、</p> <ul style="list-style-type: none">● 違反が起きたときにボールがあった位置から行われる間接フリーキックが相手チームに与えられる（第13条—フリーキックの位置を参照）。 <p>ボールがインプレーとなって、他の競技者がボールに触れる前にキックを行った競技者がボールを手、または腕で扱った場合、</p> <ul style="list-style-type: none">● 違反が起きたときにボールがあった位置から行われる直接フリーキックが相手チームに与えられ（第13条—フリーキックの位置を参照）、違反した競技者のチームにファウルが累積される <p>キックオフの進め方に関して、その他の違反があった場合、</p> <ul style="list-style-type: none">● キックオフを再び行う。アドバンテージは、適用できない。

理 由

英語とフランス語版における間違いの訂正

<日本協会の解説>

英語版2010年競技規則では、キックオフでボールをけた競技者が、他の競技者が触れる前に再びボールを手で触れた場合、“間接フリーキック”が相手チームに与えられるとされていた。しかし、ボールを手で触れた場合の反則はハンドリングの反則であり、2つの違反が同時に犯された場合、より重たい方の罰則が与えるという原則に照らし合わせると、明らかに誤りであった。

日本協会は、国内における混乱を避けるため、FIFAから明らかな間違いであることの確認をとり、日本語版2011年競技規則では既に“直接フリーキック”と修正済みである。

第12条 - ファウルと不正行為

間接フリーキックで罰せられるファウル (英語のみ)

現在の文章

ゴールキーパーが次の4項目の反則を犯した場合、間接フリーキックが相手チームに与えられる。

- ピッチの自分自身のハーフ内で、4秒を超えてボールを手や腕、または足でコントロールする。
- ボールをプレーしたのち、相手競技者がプレー、または触れていないにもかかわらず、ピッチの自分自身のハーフ内で、味方競技者によって意図的にゴールキーパーにキックされたボールに再び触れる。
- 自分自身のペナルティーエリア内で、味方競技者によって意図的にゴールキーパーにキックされたボールを直接手、または腕で受ける。
- 自分自身のペナルティーエリア内で、味方競技者がキックインしたボールを直接手、または腕で受ける。

承認された文章

ゴールキーパーが次の4項目の反則を犯した場合、間接フリーキックが相手チームに与えられる。

- ピッチの自分自身のハーフ内で、4秒を超えてボールを手や腕、または足でコントロールする。
- ボールをプレーしたのち、相手競技者がプレー、または触れていないにもかかわらず、ピッチの自分自身のハーフ内で、味方競技者によって意図的にゴールキーパーに向けてプレーされたボールに再び触れる。
- 自分自身のペナルティーエリア内で、味方競技者によって意図的にゴールキーパーにキックされたボールを直接手、または腕で受ける。
- 自分自身のペナルティーエリア内で、味方競技者がキックインしたボールを直接手、または腕で受ける。

理由

英語版にある“キックされた”という語句により誤った解釈が発生するのを避けるため - ボールが頭や身体その他の部位でパスされた場合であっても、反則が犯されたことになる。

<日本協会の解説>

ゴールキーパーが一度プレーしたボールを味方競技者が戻し、再びゴールキーパーが触れること(リターンパス)は反則であるが、その戻し方は“ける”によるものだけでなく、頭や胸によるものであっても認められていない。

しかしながら、英語版2010年競技規則では、スペイン語等他の言語に引きずられ、“キック”と表現したために、誤った解釈により混乱が生じた。正しい解釈によりフットサルがプレーできるよう、“ける(キック)”、ヘディングを含む、あらゆる部位によるパスを“プレー”と訂正した。

日本語版2011年競技規則では英語版を直訳し“キック”と表現しているが、FIFAの確認をとり、これまでとおり、すべての部位によるパスが対象であると解釈している。

本改正は 2011 年 7 月 1 日から効力を発し、すべてのメンバー協会において適用されます。

国際サッカー連盟 事務局長
ジェローム・ヴァルク

写し送付： F I F A 理事
大陸連盟
F I F A フットサル・ビーチサッカー委員会
F I F A 審判委員会